
絶対音声

榎 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対音声

【Zコード】

Z8958C

【作者名】

檻 麻容

【あらすじ】

夢の中での出会いから、意識した。耳に残る声。それはどちらも同じだった。音が、声が二人を近づけていく。夢の中での『彼』は、何を伝えたいのか - -

1・夢の中で出会い

感覚が、無くなつたのかと思った。

自分を取り巻く全てが白く、色を持たなかつた。その中で鮮やかに存在するのは一人の人物で。

彼の名前を呼ばうとしたが、声は出なかつた。

「何なんだ…？」

汗で張り付く服に不快感を覚えながらも、せんすりよう泉水涼は夢を思い出そうとした。妙な浮遊感と共に、確かに心地良い雰囲気を感じた。あの鮮やかな印象は現実にはないもので、何故彼が出てきたのかはわからなかつた。現実では、たまに彼に視線を遣ることはあつたが、理由はなかつた。

ない、と思つていた。

涼は思考を振り切り、学校へ行くために制服に着替えようとベッドから降りた。床から伝わる冷たさが、これを現実だと実感させた。

朝の人混みが嫌で、涼はいつも早くに登校していた。高校は中学より規模が大きく、電車は時間帯によつてかなり混み具合が違う。始業時刻の三十分前は一般生徒は少なく、運動部の声だけが校舎に響いた。あと十分もすれば徐々に人が増えてくる。その十分の余裕が、涼に安息の時間を与えていた。

教室のドアを開けると、いつも通りに一人の生徒が姿勢正しく席に着いているのが目に入った。

「おはよう」

涼の挨拶に反応した生徒は振り向き、銀縁の眼鏡を押し上げて答

えた。

「おはよう」

形式的に返しただけだとわかる挨拶に、涼は苦笑した。彼が無愛想なのはいつものことだった。

黒瀬千尋。

一年から同じクラスの優等生だった。入学してから試験で彼以外が一番を取ったことはない。全国の模試でも優秀な成績を修めており、教師から一目置かれている人物だった。しかし、生徒からの評判は悪かった。嫌みと取れる発言ばかりをして、無表情で愛想はなかつた。教師に対しても特別良い子を演じることはなく、ただ当たり障りなく過ごしているように、涼には見えた。その千尋の行動の理由が知りたかった。その為、目で追つてることが度々あつた。何度もが合つたことがある。

涼は真ん中の列の前から一番目の席に座る千尋の席をちらりと見、その千尋から右隣の列の二つ後ろの自分の席へと座つた。その角度からは、千尋の顔の輪郭が見てとれた。意外にも綺麗な輪郭を描いている。時折覗くペンを持つ手は男のものには違ひなかつたが、すらりと細い指がしなやかに見えた。

「…変態か」

涼は夢との相違を見つけようと千尋を観察している自分に気付き、自己嫌悪に陥つた。見れば見るほど違いはなかつた。夢では美化されていると思っていたが、そのままの千尋だった。涼は、何故自分が細部まで知つていてるかを疑問に思つた。それほどまでに千尋を見たことはなかつた。それなのに、夢では再現されていた。

思考に呑まれながらも、涼は鞄から教科書とノートを取り出し、ノートに書き込んでいった。考えていることと書くことは違う。英語の構文をすらすらと書きながらも、涼は夢の分析をしていた。夢は深層心理だということを聞いたことがあつたため、涼には何か意味があるよう思えて仕方なかつた。その間も千尋は姿勢を崩さず、机に向かつて何かを書いていた。

二人だけの静かな空間は、慌ただしく廊下を走る生徒の足音と、騒

がしい声によつて壊された。十分間は高速に過ぎ去つていた。涼は次の時間の予習まで済ませたノートを片付け、訪れるであろう友人の襲撃に備えた。朝の短い時間も休憩であることには違ひない。話に興じるにはちょうど良かつた。

「泉水！ 昨日なー」

涼の姿を見るやいなや話しだす友人に苦笑しながらも、涼は空いている席を勧めた。まだ登校してきていらない生徒の席。その席に友人、葛西晃一かさいこういちは座り、昨日あつたことを話し始めた。それを千尋が一瞬、不思議な笑みを浮かべて見ていたことを、涼は知らなかつた。

2・教室で声をかけた

涼にとって、英語の授業は退屈だった。生徒が話す明らかな日本語発音の英語は不協和音のように耳に響き、涼はいらいらしながらペンを回して気を紛らわしていた。教師は、机の間を縫うようにして歩いている。教師の発音はまだマシな方で、読むなら教師が読めばいいのに、といつも思う。音に敏感な涼は、自分自身が不快な音を発しないように、英語の発音もネイティブに近いものを習得していた。そういう努力は惜しまない。

生徒の発表が終わり、教師は教壇に立つた。

「二人組みで三十一ページの会話すること。誰と組んでもいい」それを合図に、生徒は席を立ち、親しい友人の元へと移動していく。ある程度組み合わせは決まっていた。数人のグループで漏れた者は他の余つた人と組み、自然と組は出来上がっていた。その中で、千尋はいつも一人だった。クラスの人数は奇数で、自然と教師と組むことが多かった。欠席者がいれば、余つた者と成り行きで組むことになる。

いつものように一人残っていた千尋は席から立つことなく、教師が来るのを待っていた。

「黒瀬、一緒に組まないか？」

涼が掛けた声に千尋は振り返り、怪訝な顔をした。そんな顔をされる理由がわかり、涼は思わず苦笑いを返した。

「何で僕なの？ いつも組んでいる葛西くんは？」

「別にいつも組んでいるからって、今日もそつする必要なんてないだろう？ で、どうする？」

涼の誘いに、千尋は口の端を上げて頷いた。嫌みな感じがする仕種だが、反対に少し打ち解けた感じもする。それを確かめて、涼は千尋の隣の席に座った。

余った葛西は教師に誘われ、違う親しくしているグループへと逃

げていった。まだ誰が余るかわからない。

涼はそれを見届ける前に、千尋へと向き直った。千尋はじつと涼を見ていた。

「何?」

「いや、始めるよ。僕からでいいよね」

疑問形ではない言葉に、涼は頷いた。それを確認してから、千尋は教科書を読み始めた。流れるような英語は涼の嫌いなものではなく、むしろ好きなものだった。少し高く感じる声は耳に馴染む。千尋も涼も本読みで当てられたことはなく、互いに発音は知らなかつた。

涼は千尋の声に聞き惚れていた。

「泉水くん?」

「ああ、ごめん。えっと…」

涼は自分が読む場所を確かめ、千尋に遅れないように読んだ。千尋が意外そうに顔を見ているのを涼は気付いていたが、気にせずに読んでいった。千尋は遅れることなく続きを読み、会話は進んだ。自然に流れる教科書の会話は数分で終わり、一人はすることがなくなつた。他の生徒はまだ半分もいっていないところで、どれだけ早く終わつたかがわかる。周りを見回していた涼は、ふと千尋が何か口ずさんでいるのに気が付いた。リズミカルに口から漏れている声。

「マザーグース?」

「…そう。よくわかつたね」

驚いたように言つた千尋に、涼は苦笑いを返した。『マザーグース』という名前は聞いたことがある人は多いが、実際に内容を知っている者は少ない。千尋が口ずさんでいたものは有名なものではなく、どちらかと言えばあまり知られていないものだった。

「好きなんだ。意味は無茶苦茶だけど、リズムがいいから。黒瀬は何で知つているんだ?」

「…僕も好きだから。ハンパーティ・ダンパーティがきっかけで。へえ、

泉水くんも好きなんだ…」

小さく呟いた千尋の声は涼に届いていたが、涼がそれに反応する前に教師の声が聞こえた。涼は立ち上がり、自分の席へと戻つた。途中で葛西とすれ違い、文句を言われたが、涼は不思議な笑みを返しただけだった。その笑みの意味がわからず、葛西は首を傾げながらも自分の席へと向かつた。

涼は、知らない内にマザーグースを口ずさんでいた。ふとそれに気が付いた時、涼は口元を緩めた。

3・昼食に誘つて

「変わってるよね、泉水くんも」
千尋は軽く溜息を吐いた。その呆れた様子に、涼は意地悪そうに笑つた。向かい合つように座つた千尋と涼。その間には弁当とパンがあつた。千尋は弁当を突付きながら、前に座る涼と、横に座る葛西を見た。葛西は一人の様子を見ながら、自分のパンを取つて開けた。

千尋がいつものように一人で弁当を食べようとしていたところに、涼は現れた。そして、椅子を引き寄せて座つた。いつも涼と食べていた葛西は仕方ないといつよつに涼に付き合ひ、椅子を引き寄せて二人の間に座つた。

「いつの間に仲良くなつたんだ？」

葛西の尤もな疑問に千尋は口を閉ざし、涼は奇妙な笑みを浮かべた。二人のその反応に、葛西は口を動かしながら眉を寄せた。

涼は机の上のパンを取り、それを弄りながら言った。

「仲良くなつたというより、俺が黒瀬に興味を持つただけ。結構面白い人物だつてわかつってきたところ」

涼の言葉に葛西は生返事を返し、千尋は顔を顰めた。面白い、と評されたことに対する千尋が何か言いたいことが涼にはわかつた。しかし、口にものが残つていたために言えなかつた。それを嚥下してから、千尋は固い声で言った。

「…面白いって何

「そのままの意味。意外性があるからな」

「泉水くんも同じじゃないか」

千尋は不満そうに涼を睨んだ。その鋭い視線を涼は飄々とかわし、葛西に同意を求めるように視線を送つた。葛西は一人の空気についていけず、なんの反応も返すことなく食べ続けた。

千尋はそれに対しても言わず、黙々とご飯を口に運んだ。正し

い持ち方で動く箸の動きは綺麗なもので、涼は感心して見ていた。涼は和食の作法は知識としては持つており、それを実践するとなるとかなり大変だということを知っていた。実際、まだ完璧には出来ない。そのため、人前で何かを食べるときはなるべく箸を使わないものを食べる。人の目を気にしているといえばそうだが、それよりも涼は自分が不快に思うことはやりたくない。発音にしても、箸の動きにしても、中途半端にはしたくない。

涼の視線に気付いた千尋は、それが箸に向けられていることを疑問に思った。見ていて楽しいものではない。

「泉水くん？ 箸が気になる？」

「ああ、ごめん。綺麗に持つんだな、と思つて。動かし方も手本のようだし」

素直に褒めた涼はまだ千尋の箸を見ており、千尋は言葉に詰まつた。そんなことを言われたことはなかつた。所作一つ一つは幼い頃に教えられたもので、自然になつていていた。そしてそれを気に留める者もおらず、千尋は当たり前のように振舞つていた。

しかし、涼は違つていた。一つ一つの動きに目を留め、良いところがあれば賞賛する。そんな涼の言葉が千尋には新鮮だつた。

「…ありがと」

照れたように言つた千尋に、涼は苦笑して答えた。嫌みなのはそう見えるだけであり、千尋自身は揃くれているわけではない。それが涼には律儀に挨拶を返すことから何となくわかつていた。

暫くの間傍観者だった葛西は、いつもと違つ千尋と涼に何気なく聞いた。

「結構気が合つてる？」

「どうかな。共通点は見つかってきたけど

涼は数時間前のことと思い出して言つた。英語に関しては共通点が二つある。発音とマザーグース。短時間で二つもあつたのだから、もつとあるかもしれない、と涼は心が弾んだ。葛西とはどちらかといえば共通点はあまりない方で、だからこそ一緒にいて楽しいこと

があつた。違う考え方を持っているから、話が進むこともある。普通はある意見の衝突も、涼が葛西に対して持論を言わないことから少なかつた。涼がこれだけは譲らない、というものだけは葛西が折れ、それ以外は涼が容認していた。

涼は容姿が良く性格も問題はないため、クラスでは人気がある方だったが、一緒にいるのは葛西が多くつた。付き合つ人数が多い程、面倒なことになる機会が増える。煩わしいことは避けたかった。千尋のように徹底して人付き合いをなくす、というのも一理あつたが、そこまで非情にはなれなかつた。一人が嫌というわけではないが、一人でいて楽しいこともない。

「そういえば、黒瀬が一人でいる理由つて何？」

涼の素朴な疑問に、千尋の動きが止まつた。葛西は咽て苦しそうに息をした。葛西の背中を擦つてやりながら、涼は千尋にわからない、と顔に表した。特に意味はなく、純粋な疑問だということがわかる表情だつた。

千尋は、涼に向かつて眉を寄せて笑つた。

「誰も寄つてこないだけだよ。こんな嫌みな優等生に近付きたくないからね」

自分で優等生、と言つた千尋は自嘲気味に苦笑した。自覚して嫌みのように振舞つている。そう感じた涼は、何か意図があることを察したが、納得したように頷いただけだつた。無理に踏み込もうとはしない。そこに踏み込んでいいところまで、自分は達していないことはわかつっていた。

葛西は涼の爆弾発言に動搖したが、千尋の氣にしていない様子にほつと息を吐いた。悪気がない涼の言葉は、時に核心を突く。それを知つている者は対処のしようがあるが、知らない者は勝手に傷付く。葛西はそんな涼が心配だつた。

「泉水…お前、それはやめろって言つただろ…」

「それ？」

葛西の言葉に、千尋が聞き返した。葛西は初めて千尋に声を掛け

られ、一瞬動きを止めたが、何もなかつたかのように困つた顔で笑つた。

「爆弾発言。妙に核心突くからさ、一拍置けつて言つてんだよ。黒瀬は問題なかつたみたいだけど、勝手に傷付いて責められることがあるんだ。正しいのは泉水なんだけど」

「…泉水くんらしいのかな」

妙に納得して苦笑した千尋に、葛西はそうだろ、と頷き返した。涼は葛西の背から手を退け、無言でパンを口に運んだ。貶されではないが、褒められてはいない。何度も忠告されても、口に出てしまうものは仕方なかつた。

千尋は含み笑いをしながらも食べ続け、空になつた容器を薄い布で包んだ。箸を仕舞おうとしたところを涼はじつと見ていた。箸先は三センチも汚れではおらず、それだけで千尋の技量が知れた。和食が好きだからこそ、涼は正しい食べ方で食べたかった。それは決して無理なことではない。葛西は涼が何か考えこんでいるのを横目に、パンの袋を近くにあつたゴミ箱に捨てて立ち上がつた。涼は椅子を引く音に気付き、少し残つていた欠片を口に入れた。そして空の袋を細く折つて結んだ。小さくなつたゴミは放物線を描いてゴミ箱に入り、葛西と顔を合わせて笑つた。

その二人の様子を横で見ていた千尋は、微妙な笑みを口に浮かべた。

「黒瀬？」

「なんでもないよ。次は選択科目だけど、教室移動は間に合うの？」

千尋の笑みに首を傾げた涼に、千尋は首を横に振つて否定した。そして、机から教科書を取り出して移動の準備を始めた。涼と葛西は自分の席に戻り、各々必要なものを手に取つて、決まつていたかのように千尋の元へと戻つた。

千尋はそれに少し違和感を覚えたが、気にしていない涼と葛西を見て考えるのをやめた。

「葛西くんは美術で、泉水くんは…書道？」

授業で使う道具は教室にあり、持つていくものは教科書と筆記用具くらいだった。そして、教科書で受けている科目がわかる。千尋の手には音楽の教科書があり、葛西には美術、涼には書道のものがあつた。三種類の授業は見事に重なつてはいなかつた。

「そう。美術つて才能の問題だから。書道は得意なんでね」

教科書をペラペラと捲る涼に、葛西はそうそう、と可笑しそうに笑つた。

葛西の反応が気にかかつた千尋は教科書を脇に抱え、顔を顰めて二人の様子を見ていた。葛西は壁に掛けられた時計をちらりと見て時刻を確認し、足をドアに向けて歩き出した。

「美術がきつかけだつたしな。無いものねだりつてヤツ?」

「… そうだよ。才能つて本当にある」

諦めたように溜息を吐いた涼は、葛西の後について歩いた。千尋も少し遅れて歩き出し、音楽室へと向かつた。

「… なんで音楽じやないの」

千尋の咳きは、廊下に響く生徒の声に搔き消され、誰の耳にも届かなかつた。

4・放課後に残った

午後の授業が全て終わり、放課後を迎えた。部活に向かう生徒や、そのまま帰宅する生徒で廊下は賑わった。千尋は、優等生という名目で教師から頼まれたアンケート集計をするために教室に残った。面倒な仕事を押し付けられたとしか思えない。しかし、千尋は断る理由がなかつたために引き受けた。考えず出来るものは、時間潰しには良かつた。

千尋が十セントほどの紙の束を机に置いていても、手伝う者はいなかつた。それはいつものことで、千尋は気にしなかつた。この状態を望んだのは自分だということはわかつていて。そして、下手に手伝つてもらつて余計な仕事が増えるよりはマシだつた。役に立たない手伝いはいらない。千尋は眼鏡を中指で押し上げ、紙の束に手を伸ばした。

「黒瀬、一人でやるんだ？」

横から掛けた声に、千尋は目線だけを動かした。そこには声から予想出来た人物、涼が立つていた。葛西もその後ろから様子を見ており、千尋は口の端を上げた。

そして、右手のシャープペンをくるりと回して頷いた。

「もちろん。いつものことだよ」

簡単に言つた千尋は、会話は終了した、といつもように目線を用紙へと戻した。一枚一枚目を通して、集計していく。速い作業は見ていて気持ちの良いものだつた。涼は千尋の前の席に座り、向かい合うように座つた。そして集計結果を記入する白紙の紙を手元に置き、紙の束を半分に分けた。葛西は涼の横に移動した。

千尋は突然の涼の行動に動きを止め、訝しげに涼を見た。

「泉水くん？」

「手伝うよ。手伝いなんていらないかも知れないけど、それでも少しは違うだろ」

作業がしやすいように用具を配置していく涼に、千尋は呆気に取られたが、とりあえず頷いた。涼が手伝うとなると、時間は短縮されることは間違いない。それを千尋は知っていた。千尋は呆然としながら、涼の横に立つ葛西に視線を向けた。葛西は鞄を抱えたままで、涼も帰る用意をしていたが、千尋を手伝うことでの鞄を下ろした。

葛西は、千尋の視線にすまなそうに顔を歪めた。

「悪いな。俺は手伝えない。じゃあな、泉水、黒瀬」「いや、ありがと。さよなら」

手伝えないことを詫びて帰ろうとした葛西に、千尋はその気持ちだけを受け取り、礼を言つて帰りの挨拶した。葛西は意外そうな表情を浮かべたが、可笑しそうに笑つて手を振つてから教室を出て行った。千尋にはその葛西の表情の変化の意味がわからなかつた。

涼は、不思議そうに葛西が去つた後も目を向けている千尋に対し、苦笑した。その苦笑に気付いた千尋は首を傾げた。

「黒瀬つて素直だよな。嫌みそうに振舞つてるから、知らなかつた。葛西も意外だつたんだろう」

素直、と言つた涼は、くすくすと笑いながら動かす手を止めなかつた。千尋はなんとも言えない困つたような顔で、手元に残つた紙に手を付けていった。そんなことを言われたのは初めてだつた。素直というよりも、ただ咄嗟に言つただけのこと。それを二人は意外だと返し、笑顔を浮かべていた。

千尋は胸がざわざわするような感じがしたが、作業に没頭することで気を紛らわせた。涼が手伝つたことにより、一時間はかかると思つていた集計が半分以下で終わつた。まだ教室には生徒が数人残つていて、何人かが涼と千尋をちらちらと見ていた。珍しい組み合わせなのが気になるのだろうと予想できる。千尋はその視線を無視し、帰る仕度をした。涼は椅子を戻し、床に置いた鞄を手に取つた。すぐに帰ることが出来るのに、涼はそのまま動かなかつた。千尋は帰る用意ができ、鞄を手に取つて帰ろうとした時、涼は当然のよう千尋について歩いた。

「家がどこか知らないけど、校門までは一緒に？」

「そうだけど」

千尋は教室に視線を遣つた。教室に残る生徒のほとんどが、千尋と涼を見ていた。不躾な視線に千尋は溜息を吐きたくなつたが、涼は気にしていない風で、出ていった。千尋は考えるのを止め、涼の後を追つた。去つた後で何を言われているか大体わかる。涼が気にしていないのなら、千尋は気にする必要がないと思い、思考を振り切つた。

「で、黒瀬の家はどこ？」

「駅を越えて、少し行ったところ。小学校があるところの近く」

「近いんだな。それなら駅まで同じだ」

涼は確かめた後、千尋がついて来ることを確信した足取りで先を歩いた。

千尋は密かに笑みを浮かべ、すぐに表情を変えて涼の後を追つた。

5・帰り道に約束をして

駅に向かう道を涼と千尋は並んで歩いた。道幅は広く、歩道があるために並んで歩いても問題はない。千尋は隣を歩く、自分より少し背の高い涼を疑いの眼つきで見ていた。一緒に帰ろうとした涼の真意がわからない。

その視線に気付いた涼は、横田で千尋を見た。

「何?」

「…別に。そういうえば、葛西くんと仲良じよね。美術がきっかけって言つていただけど、何?」

涼の問いに、千尋は一瞬目を逸らしたが、すぐに思いついたように涼に目を向けて質問を返した。咄嗟に思いついたことだったが、気になっていたのには違いない。

千尋の質問に、涼は懐かしむように田線を上げ、そしてククッと喉の奥で笑つた。

「明日、あいつに絵を見せてもらえばわかるさ」
楽しそうに、少し意地の悪い笑みに変えた涼は、速度を変えずに歩いた。涼の答えにしばらく考え込んでいた千尋は足の動きが鈍くなり、涼との距離は広がつた。千尋は顎に手を当てて考えており、それに涼は気付かなかつた。

少し歩いて、隣を歩いていた千尋がいなくなつたことに気付いた涼は後ろを振り返り、千尋の様子を見て口元に笑みを浮かべた。

「黒瀬」

「…え? ああ、ごめん。絵、ね。明日見せてもらつよ」

涼は千尋が追いついてから、また並んで歩き始めた。駅で別れるのだから、そのまま先に行つてしまえば良かつたのだが、涼はそうしなかつた。千尋は涼の一面を知り、その優しさに心が温かくなつた。

駅で別れるまで、他愛もない会話は途切れることなく続いた。

6・MDを見つけた

「涼」

はつきりと自分の名前を呼ばれた。その声は知っているもので、声の持ち主はわかつっていた。

振り返った先にいたのは頭に浮かんでいた人物で、彼は穏やかに笑っていた。その笑顔は見たことがなく、自分の想像であることが理解できた。

千尋はいつもとは違う、切なく感じる声で言った。

「声を聞かせて」

「声…？」

涼は思わず喉を押さえた。話すために声は出している。それなのに、夢の中の千尋は切実に訴えるように言った。涼は自分の夢なのにも係わらず現れる千尋とその言葉に戸惑った。理解できない。夢の中の千尋は何を望んでいるのか。そして、その夢を見る自分は何を思っているのか。

夢は深層心理の表れという言葉を思い出し、涼は額に浮かんだ汗を拭つて気持ちを入れ替えた。

深層にある意識が、何かを示している。

いつものように千尋は一番に教室に入り、人の気配が消えた空気を肌で感じた。これから嫌でも濃くなっていく。澄んだ大気を取り入れるために、運動場に面した窓を開けた。

全ての窓を開けて五分程経ち、半分の窓は閉めていた。空気さえ入れ替われば、後の温度調節は人の多さによつて変えれば良い。人の体温で、室温は微妙に変わる。一人では肌寒くなつた教室を、

千尋は満足そうに眺めた。

そのとき後ろのドアが開き、涼が入ってきた。いつもとは違い、後ろに葛西が続いた。

「おはよう

先に千尋が挨拶し、涼は軽く返した。

「おはよう」

「うわ、本当に黒瀬がいる。早いよな…おはよ」千尋を認めるに驚いたように口を開けた葛西は、感心したように頷いた後に短く挨拶した。

千尋はそれが癖だとでも言つように、口の端を少し上げた。爽やかな笑顔とはほど遠いが、それでも涼と葛西には、それが悪意を含んだものではないことがわかつていた。

涼は自分の席に鞄を置き、一度も座ることなくまた入ってきたドアに向かって歩いた。手には四角い布の袋を持っていた。葛西も涼と同じように荷物を置いてドアへと向かつた。

「黒瀬。葛西の絵を見るんだろ」

「え、うん。でもいいの？ 葛西くん」

二人の待つドアの前へと小走りで向かつた千尋は、葛西の顔を窺うように見た。葛西はそれに楽しそうに口元を歪め、人差し指を立てて横に振つた。

「いいぜ。黒瀬がどんな反応を見せるか楽しみだ」

ニシシ、と奇妙に笑つた葛西は、前を歩いた。その後に、涼と千尋は続いた。涼は手に持つていた袋からイヤホンを取り出し、耳に着けた。形状からMORWOKERマンだといふことがわかり、千尋はその中身が気になった。

「何聞いてるの？」

「洋楽。何のかは不明」

「不明？」

不自然な答えに、前を歩いていた葛西は振り返つて嫌な顔をした。

器用に後ろ向きに歩き、三人は足を止めずに会話を続けた。

「またアレか？ 聽くの止めとけって。怪しいじゃないか」

「アレ？ 怪しい？」

不吉な単語に、千尋は眉を寄せた。涼は葛西の警告を聞き流し、一人の声は聞こえる程度に音量を調節して音楽を聴いていた。

葛西は呆れたように涼を見、それから苦笑して千尋に説明した。

「一週間に一回くらいの間隔で、泉水の靴箱にMDが入ってるんだ。中身は洋楽。気持ち悪いから止めろって言つてんだけだ、曲が泉水の好みださ」

「…へえ」

特に興味無さ氣に頷いた千尋に、葛西は困ったように笑った。千尋も一緒に説得してくれれば、と思っていたこともある。しかし、千尋は個人の自由、とでもいうように、MDについてはそれ以上触れなかつた。杞憂に終わればいいが、と葛西は思つていたが、それでも何か引っ掛かる。何度かそのMDを聴いたことがあるが、特に異常はなかつた。しかし、脳裏に掠める何かが不快にさせる。涼は何も感じていない様子だったことから、葛西は深く追求することを止めた。

7・抽象的な絵を見て

教室から離れている美術室には、誰もいなかつた。油絵の具の独特の臭いが鼻を擡る室内に踏み込んだ葛西は、一直線に向かつて行つた。そして迷うことなく一枚の絵を持ち、千尋に向けた。千尋は近くに寄り、その絵を眺めた。

「教会…？」

ぱつりと呟いた千尋に、葛西は目を見開いた後、喜びで表情を崩した。千尋はその葛西の反応に、驚きで声が出なかつた。その後ろで涼は一人の様子を興味深そうに見ていた。

「よく分かつたな。慣れてきたら大体分かるようになるみたいだけど、一目で分かるなんて…」

千尋に向かつてにこにこと嬉しそうな表情を浮かべた葛西は、自分の方へと絵を回転させた。キャンバスには赤を基調とした、形が曖昧なものが描かれていた。抽象的すぎて、ぱつと見ただけでは分からぬ。十字架もなければ、聖母も描かれてはいない。しかし、千尋には分かつた。千尋はただ、絵から感じるものを言葉にしただけではつきりと確信を持つていなかつた。そのため語尾を疑問系にした。葛西の喜びようから、それは中々人に理解されないものだとはなんとなく分かつた。

「きつかけつて、もしかして」

「そう、泉水も見抜いたんだ。こいつのときは確か海の絵だつたよな」

確かめるように聞いた葛西に、涼はそうだと首を縦に振つた。葛西は持つていた絵を元に戻し、奥の部屋へと入つて行つた。葛西の意図が分からずにその場で待つていた千尋は、涼の顔を見た。まだ耳にはイヤホンが着けられており、涼は視線だけで返した。涼の視線は葛西が消えていった奥の部屋へと向けられていた。

一分も経たない内に、葛西は同じ大きさのキャンバスを手に、一

人の前に立つた。そして、発表するかのように堂々と絵を引っくり返した。

そこに描かれていたのは、一面の深い蒼だった。少し濃淡があり、緑が所々に隠れていたが、全体的に眺めると蒼と白以外の色は見出せなかつた。

今度は、千尋にははつきりとその絵がわかつた。

「…確かに海だね。空との境目が曖昧だけど…」

千尋の感嘆するような咳きに、葛西は何度も頷いた。その度に絵も揺れた。

涼はイヤホンを外し、葛西の持つキャンバスに触れた。油絵のそれは葛西の個性が出ていて、凹凸がはつきりとわかる。軽い感じに見られる葛西だが、絵に関しては類を見ない技術を持つていた。しかし、それは教師に認められるものであつても、同世代には通じない。葛西の感性が余すところなく表現された抽象的すぎる絵は、涼だけが理解できた。それがきっかけだった。いつもなんとなく付き合つてきた友達とは違つ、自分を理解する人物は、傍にいることが苦痛ではなかつた。話を合わせなくてもいい。適当に相槌を打たなくてもいい。それが息抜きできる、涼と葛西の関係だつた。

今その二人の中に踏み込んだ千尋は、何も言えずに沈黙を保つた。懐かしむように絵に触れていた涼は、さつと千尋の手を取り、さつきまで自分が触れていた部分に当つた。蒼が薄くなり、白に近くなつている部分だつた。

「ここが空と海の境目。緑が少し見えるけど、わかるか？」

8・手が触れた

涼が人差し指を添えた千尋の中指は、凹凸をなぞった。微かに感じられる境目は千尋に何も与えなかつた。ただ、千尋は涼に握られた手に神経が行き、まともに絵が見れなかつた。同性でも手が触れることはほとんどない。久しぶりの人との接触に、千尋は体が固まつた。嫌ではなかつたが、それでも慣れない。

「黒瀬？」

反応を返さない千尋の顔を窺うように覗き込んだ涼に、千尋は顔を歪めることしかできなかつた。ずっとキャンバスを手に一人の様子を見ていた葛西は、千尋の表情に失笑した。

「泉水、手を放してやれ。黒瀬が固まつてゐるだろ。誰だつて突然手を握られたら動搖するつての」

葛西の忠告に納得した涼は手を放した。千尋は自由になつた手を開いたり握つたりして確かめた。まだ、涼に掴まれた感覚が残つてゐる。少し低い体温は自分とは違うもので、容赦なく体温を奪つていつた。熱いものは冷たいものに吸収される。離れるときには近くなつてゐた手の温度に、千尋はくすりと笑つた。

千尋が何に対しても笑つてゐるのかと涼と葛西は目を合わせたが、その疑問は予鈴の音に搔き消された。美術室から教室まで、急いでも三分はかかる。予鈴は授業開始の五分前の合図であり、三人は慌てた。葛西がキャンバスを片付けに行くのを待つて、三人は教室へと向かつた。廊下を走つてゐるのを擦れ違つた教師が咎めたが、千尋が軽く頭を下げて謝罪した。千尋が廊下を走つてゐるという事実に教師は驚いたが、それでも礼儀正しい千尋に無言で急ぐことを促した。

追いついた千尋に、葛西は呆れたように笑つた。

「丁寧なことで」

「それが僕なんだよね？」

「ヤリと何か企んでいるような笑みを浮かべた千尋に葛西は絶句し、その後に可笑しそうに笑った。涼は何も言わず、楽しそうに二人を見ながら走っていた。

三人が教室に着いたのは、本鈴の一分前だった。

休憩時間は十分ずつしかないため、千尋は宿題の時間に充てていた。話していれば短い十分だが、問題を解くには充分だった。宿題は家に持ち帰るときもあれば、全て終わってしまうときもある。千尋が座つたままでいるのを涼は確かめ、鞄からイヤホンだけを出してMDを聴いた。葛西は十分の休憩時間はいつも他の仲良くしているクラスメイトと話している。涼は机の上に目を向け、前の授業の教科書が広げたままあつたため、出された宿題に手を付けていった。音楽は耳を素通りする。宿題は授業の復習のような問題ばかりで、涼は休憩時間の終わりを告げるチャイムが鳴る少し前に全てを終わらせた。

9・音楽室で出会った

昨日と同じように、涼、千尋、葛西は三人で昼食を取った。千尋が一人で食べようとしているのに、当たり前のように涼と葛西は集まつた。千尋は意外そうに目を丸くしたが、癖になつて口元だけの笑みを浮かべ、一人を受け入れた。

ほとんど会話はなかつたが、気まずい雰囲気ではなかつた。いつも明る過ぎるくらいに振舞つてゐる葛西も、特にはしゃぐこともなく静かに会話をしている。どちらが本当の葛西なのか千尋にはわからなかつたが、涼は平然としていることより気に留めなかつた。流れる空気は不快なものではない。三人はそう感じていた。

「黒瀬が入つても、変わらないな」

葛西の漏らした言葉に、涼は格好良いと言われる顔にっこりと笑みを浮かべ、千尋は動きを止めた。しかしすぐに箸を持ち直し、口に運んだ。葛西は何事もなかつたようにパンに醤り付き、涼は野菜ジュースを飲んだ。

このとき、千尋が微かに目を細めたことに、二人は気付かなかつた。

放課後、涼はいつものように早く帰る葛西に別れを告げ、帰る準備を始めた。机の中には重い辞書だけを残し、その他の教科書類を鞄に詰める。辞書は家にあるため、持ち帰る必要はなかつた。涼は本が詰まつて重さが増した鞄を肩に掛け、教室を見回した。

教室にはまだほんどの生徒が残つており、いなくなつた生徒の方が少ないほどだつた。そのいなくなつた生徒の中に千尋が入つていることに、涼は気付いた。千尋の席に鞄はなく、隙間から見える机の中には何もなかつた。

涼は千尋が先に帰つてしまつたことを少し残念に思つたが、帰ろ

うと靴箱に向かつて歩き出した。教室を出たところで、朝に見た葛西の絵を思い出し、涼は美術室に寄つてから帰るうつ思い直した。葛西が今、美術の時間に書いている絵が気になる。涼は美術室、書道室、音楽室がある棟へと歩いて行つた。

一階には書道室があり、目的の美術室は二階にある。書道部が活動しているはずだが、物音はなく、しんと静まった一階の廊下を過ぎ、階段を昇つて行つた。段数が多いわけではないため、すぐに二階に着いた。踊り場で一息吐いた涼は、美術室へと向かおうとした。その時、涼の耳にピアノの音が入つた。微かな旋律だが、涼にははつきりと捉えられる。音楽室を使う部活が休みの日だったと思出した涼は、そのピアノを弾いている人物に興味を持つた。足は自然と階段を昇り、あつという間に二階へと着いていた。

より一層明瞭になつた音は優しく、そして上手かつた。曲に技術がついていつている。かなり高度な技術を必要とする曲が終わり、少し間を空けて、また演奏は始まつた。涼は音を立てないよう、元気な声で、教室の後ろのドアを開けた。

ピアノを弾いている人物はそれに気付かず、音が途切れるることはなかつた。ピアノの前に座る人物を見たとき、涼は驚いたが、何故か納得した。

そこにいたのは千尋だつた。

譜面はなく、全部覚えている様子の千尋は視線を指先に向けていた。そのため、涼には気付かず、切ない表情を浮かべて弾き続けていた。

涼は大きく深呼吸をし、口を開けた。

突然の声に、一瞬音は切れたが、何事もなかつたかのように続いた。千尋は指を動かしながら顔を上げて、涼の姿を認めた。涼は左手を胸に当て、口を大きく開けて歌つていた。その口から出る歌声は透明なソプラノで、地声からは想像できないものだつた。地声も耳に良く通るが、歌声は比較できないほど耳を抜ける。教室の一番後ろで歌つているのにも係わらず、かなりの声量で響いた。千尋は

涼が曲の初めから歌つていてことに気付き、その通りに弾いていった。

千尋が奏でるピアノと涼の紡ぎ出す歌声は、互いに主張しながらも溶け合っていた。聴衆がいないことより変な力が入らず、二人は伸び伸びと自分の力を出した。

千尋の指が最後の音をなぞつたとき、涼は胸に置いていた左手を下ろした。

「…黒瀬つて、ピアノ上手いんだな」

「泉水くんこそ、歌声が透明だよね。アヴェ・マリアをここまで歌いこなす人、それも男の人なんて知らないよ。歌が上手いのに、なんで音楽を選ばなかつたの」

「歌は趣味だから、歌いたいときに歌つ。中学まではテストのときに歌つていたけど」

二人は互いに褒め、技量を認めていた。千尋は意識的に言わなかつたが、事前に涼の歌声を知っていた。だからこそ、千尋は涼が選択科目で音楽を選ばない理由がわからなかつた。趣味、と言い切つた涼はさつぱりとしていて、千尋はそんな涼に何も言つことはなかつた。千尋も音楽を選択しているが、ピアノは弾かない。人前では簡単に見せないのは同じだつた。

涼はゆっくりとピアノへと向かい、千尋の横に立つた。千尋は涼から視線を逸らすことなく動作を見ていた。無駄な動きがない涼は見えていて気持ち良いものだつた。千尋は嗜みで歩き方などの所作は身に付けていたが、それに劣ることはない。

涼は千尋に嬉しそうに笑つた。

「『』の棟に来て良かった。黒瀬のピアノが聴けたし。今日はたまたま？」

「この教室が空いている水曜日にいつも来てるけど」「また来ても良いか？」

涼の許可を求める問いに、千尋は考えることなく頷いた。断る理由はなかつた。涼との演奏を楽しんでいたのは確かだつた。涼も同

じ思いだつたことがわかり、千尋は田を細めて笑つた。その千尋の笑顔と承諾に、涼は表情を緩めた。

涼は本来の目的である葛西の絵のことはすっかり忘れてしまい、千尋の演奏を聴いていた。その中で一曲だけ歌い、千尋がピアノの蓋を閉めて終了した。

また昨日を同じように、涼と千尋は駅まで並んで歩いて帰った。

「お帰り、姉さん。早速で悪いんだけど、またお願ひできるかな」
千尋はリビングで寛ぐ姉、唯に笑顔で言つた。唯は鞄から使われた白衣を取り出しながら、苦く笑つた。研究室から帰つて来て早々に言われたお願ひだつたが、弟の笑顔には弱い。唯は白衣を洗濯機に入れ、自分の部屋に向かつた。その後に、千尋は続いた。

「今度はどうしたいの？」

パソコンの電源を入れた唯は椅子に座り、前に立つ千尋に聞いた。千尋は一枚の紙を差し出し、それを唯は受け取つた。そこに書かれた言葉を理解したとき、唯の表情は曇つた。

「…本当にコレでいいの？ コレだと…」

「コレでお願い」

千尋は唯の言葉を遮つた。有無を言わせない千尋の様子に唯は溜息を吐き、キーボードを叩いて編集し始めた。

千尋は画面を唯の肩越しに見て、満足した笑みを浮かべた。

「本気なのね？ 恋愛としての好きなのね？」

「…今は、前は純粋にただ一つを望んでいたのに、それが満たされると次が欲しくなる。今はもう、単純な好きでは済まなくなつてゐる千尋の真剣な声は、唯に届いた。弟だからこそ、望んでいることをしてあげたいという気持ちがある。しかし、今やつていることは、相手を傷つける結果になることはわかりきつていた。

唯は作業完了を知らせる画面に顔を顰め、顔を元に戻してから千尋を振り返つた。

「この手段が悪いことだとわかつていても選ぶのね…。私だけはあなたを責めないから。私も関わっているからと、いうのもあるけど、相手についても何も言わない」

「…ありがとうございます。姉さん、好きだよ。この人の次に」

「この人、と紙を指した千尋に、唯は困ったように笑つた。この結

果はわかっていた。相手だけではなく、千尋も傷付く。それは千尋にもわかつていた。それでも、それしか方法はなかった。止められるなら、最初から選ばなかつた。

唯が差し出したモノを、千尋は迷うことなく受け取つた。

11・好きなモノと

葛西は一人、始業時刻の四十分前に学校に来ていた。美術の時間だけでは教師の勧めるコンテストには間に合わない。放課後は時間が作れないため、葛西は早く登校していた。運動場から声は聞こえるが、校舎は静まりかえっている。葛西は正門を抜け、靴箱へと向かつた。

そこには誰もいないと思っていたが、先客がいた。葛西はその先客が千尋だとわかり、声をかけようとしたが、止めた。千尋がいる前は自分のところではなかつた。後ろ姿からは表情が窺えなかつたが、葛西は何故か声をかけない方が良いと判断した。

千尋が立ち去つた後、葛西は千尋の立つていた場所で足を止めた。そこは名字が「さ行」のところであり、その中に涼の靴箱も含まれていた。

葛西は確かめるために、涼の靴箱を開けた。

そこには予想通り、一枚のMDが入つていた。

「黒瀬……？」

MDは千尋が来る前から入れられていたのかも知れなかつたが、千尋が入れたと考える方が自然だつた。葛西はそのまま靴箱の蓋を閉め、考え込みながらも靴を履き替えて美術室へと向かつた。

千尋から送っていたMDだとわかり、葛西は安心した。聴いたときに嫌な感じがしたのは確かだつたが、杞憂だつたと思った。葛西は涼には秘密にしておこうと、美術室へ向かう中、密かに微笑んでいた。

涼は葛西から、「コンテストのために朝に美術室で絵を描く」ということを聞いていた。いつもの時間に登校した涼は、教室に千尋がいるのを見て、挨拶の後に言葉を続けた。

「葛西が美術室で絵を描いているんだけど、一緒に見に行かないか？」

「いいね。一緒にさせてもらひりよ」

涼の誘いに一つ返事で返した千尋は開いていた本を閉じ、席を立つた。千尋が隣に並んでから、涼は美術室に向かつて歩き出した。美術室へと向かう廊下に、人の気配はなかつた。美術室がある棟は文化部が使用しているだけで、文化部は余程のことがない限り、朝に活動することはなかつた。葛西は美術の教師から鍵を預かり、一人で描いている。

涼は今朝靴箱に入つていたMDをウォークマンに入れ、人の声が聞こえるくらいに音量を下げて聴いた。千尋はそれを見ながら、遠慮がちに涼に尋ねた。

「葛西くんの絵、そんなに好きなの？」

「まあね。感覚的なもので好きかな」

抽象的な葛西の絵は感覚で受け取るものが大きい。千尋にもそれがわかるため、くすつと笑つて頷き、顔を前に戻して歩いた。

涼はなんでもないかのように、不意にさらりと言つた。

「黒瀬のピアノも好きだけど」

弾かれたように涼に顔を向けた千尋は、涼の薄い笑みに言葉を返せなかつた。千尋は開けた口を閉じ、じつと涼を見てから早足で美術室へと向かつた。

涼は後ろから見えた、千尋の赤く染まつた耳に微笑した。顔も紅潮しているに違ひなかつた。

12・音のイメージが重なる

「今日は夕焼け？」

片付けを始めていた葛西の背後から、涼は絵を覗き込んだ。キャンバスは赤と黄色などの暖色で塗りつぶされていた。所々に白が微かに混じっている。完成が近い絵は、もう何が描いているかわかるほどになっていた。しかし、それが理解できる者は限られている。

葛西は筆を洗いながら、涼に頷き返した。パレットはもう片付けられていて、あとはキャンバスを直すだけという状態になった。しかし、油絵の具独特の臭いが辺りを充満している。それは絵の存在感を強くさせているようで、涼は息を大きく吸って吐いた。その時、喉から高音が漏れた。透明な、ソプラノ。それは聖歌の一部だつた。口を閉じた涼は反応を窺うように、葛西に視線を向けて了。

「…そんな音のイメージってことか」

納得したように苦笑した葛西は、絵の具が付かないように注意を払いながらキャンバスを手に取り、眺めてから片付けに行つた。奥の部屋が絵の具を乾かす専用の部屋になつている。葛西はすぐに絵を置いて涼と千尋の元へと戻つた。

千尋が考え込むように顎に手を当てているのを見て、葛西は声を掛けた。

「黒瀬？」

「あの音が絵のイメージ…うん、合うかも」

千尋は顎から手を放し、軽く指を鳴らした。夕焼けはどちらかといえば低めの音のイメージがある。しかし、葛西の描く夕焼けは高音で合つているような気がした。

葛西はそんな千尋に薄く笑い、思い出したかのように千尋に聞いた。

「そういえば、黒瀬つて泉水の歌聴くのは初めてじゃないか？」

「いや、昨日聴いたよ。その前にも一回聴いたことがあったけど」

千尋の答えに、葛西はふーん、と軽く何度も頷き、涼は驚いて固まつた。千尋が前にも聴いたことがあつたとは思つていなかつた。昨日の音楽室での千尋の反応は、聴いたことがあるとは思わせなかつた。それは先入観があつたからかもしれない、と涼は思い直した。葛西はそんな涼の表情の変化を横目で見ながら、千尋に可笑しそうに尋ねた。

「いつ聴いたんだ？」

「去年のクリスマス、駅前でストリートミュージシャンに混じつて歌つているところを。葛西くんもいたよね」

疑問ではなく言い切つた千尋に、葛西は少し考えてから頷いた。確かに、昨年のクリスマスは涼と出掛け、涼が駅前で歌つたことを覚えていた。

「あのときのを聴いたのか。あれは凄かつたからなー」

葛西は懐かしむように言い、時計を見てから歩き出した。予鈴が鳴るまで余裕があつたが、歩いて教室に戻るにはギリギリになる時間だつた。二人は葛西の後に続いた。

涼はイヤホンから流れる曲がちょうどクリスマスに歌つた曲だつたことに、口元を緩めた。

13・クリスマスの夜に

クリスマスの夜は、気温が平年より低い予報だった。そのため、ホワイトクリスマスになるかもしない、といつも以上に浮かれる人々で駅は賑わっていた。様々な電飾が街に溢れている。

涼と葛西は一人で商店街を歩いていた。

「なんか寂しい男一人つて思われそう」

「実際そうだ。絵が完成していたら、こんなに人が多いのがわかつていて外に出ないわ」

涼の不満が籠った言葉に、葛西は両手を合わせて顔を歪めた。それに対して涼は気にするな、と口の端を上げた。本当に気にしていなかつた。無理をして葛西に付き合う必要はなかつたが、涼は葛西が絵を完成させるまで付き合つていた。

大きなコンテストに応募する絵は何度も色を重ねていったので、時間が掛かつた。授業では間に合わなかつたために冬休みになつても学校に通うことになり、葛西は一人登校していた。涼は葛西からそれを聞き、出来る限りは付き合つことにしていた。いつもより力の入つている絵を楽しみにしていた。

出来上がつた絵は涼の予想を嬉しく裏切るもので、涼は思わず溜息を漏らした。その溜息に葛西は満足して絵を眺めた。絵が完成したのは締め切り前日のクリスマスになり、美術室を出たのは空が暗くなり始めた頃だった。

「良いクリスマスだつた。あの絵を見れたから」

「…恥ずかしいヤツ。ま、力作だからな。聖夜にはぴつたりかもな」

涼は数時間前に見た絵を思い出して頷いた。今回葛西が描いたのは、木漏れ日だった。光を再現するのは難しく、抽象的でも表しにくい。それを涼にはわかる形で葛西は表現した。

涼はクリスマスなのにもかかわらず駅前で歌うストリートミュージシャンを見て、悪戯を思いついたかのように笑つた。その表情を

見た葛西は諦めて見守った。涼は歌っている彼らの方へと向かい、歌い終わるのを待つた。

演奏が終わると同時に、涼はキーボードを弾いていた人物に声を掛けた。

「ソの音、くれる？」

突然声を掛けられた相手は驚いたが、それでも要望どおりにソの鍵盤を押した。その音を覚えた涼は喉の奥でその音を出し、唾を飲み込んだ。そして大きく口を開けた。

柔らかいソプラノの音が一瞬、辺りに響いた。人々の喧騒は相変わらずだったが、涼の声は歌を聴きに集まっていた数人にははつきりと聴こえていた。

「アーティング・グレイス…」

歌声を聴きつけて集まつた一人が呟いた。聖なる夜に呟う曲だつた。女性が歌うことが多い曲を、難なく高音を操つて歌つている涼。体にぴつたりとした膝までの長さのコートは黒で、神父の衣装のよう見える。

葛西は呆れたように腕を組んで、聴衆の一一番前で聴いていた。涼は後半の、最も高い音を伸びる声で出した。聴衆の息を呑む音が聞こえた。涼が最後の音を出した後、静寂が辺りを包んだ。喧騒が遠くに聞こえる。

歌い終わり、涼はその場を離れようとした。足を一步踏み出したとき、拍手がぱらぱらと起こり、それは相乗して広がった。囁んだ円に拍手が響く。

「アンコール！」

一人が叫び、後に何人かが続ける。アンコールを求める声は大きくなり、涼は困ったように葛西を見た。葛西は仕方ないだろ、とでも言つよう頷いた。

涼はもう一度同じ場所に戻り、一息吸つた。肩が上がり、その動きに聴衆は段々と静まつていった。

第一声から、ほとんどの聴衆には何の曲かわかつた。クリスマス

に歌う曲、『きよしこの夜』。それを英語で歌う涼に、集まつた人々は柔らかい表情で聴いていた。単調だが、優しく響く曲。何度も聴いたことがあるが、それでも良い曲に変わりはない。

聴衆の中に、千尋はいた。母親に頼まれた茶道の道具を買いに出て、たまたま駅前を通りて。街の喧騒の中から聴こえた音は人の声で、千尋は惹かれるように足を運んだ。少しづつ集まりだした人に混じり、歌う人物を見た。

アカペラで歌う涼は、聖夜のためだけに現れた存在のように見えた。黒のコートが神秘さを増す。無表情で歌っていたが声に感情が籠つていて、その差が余計に聴覚を鋭くさせた。

千尋はこのとき、初めて涼を知った。クラスメイトになつてから、半年以上を過ぎてのことだった。

14・声が聴きたかった

距離が縮まっていた。

彼はいつも学校で見ている学生服を着ていたが、一つ違っている所があった。

眼鏡を掛けていない。

「涼」

前回と同じようにそう呼んだ千尋に違和感はなかった。慣れではなく、当然のように思える。眼鏡を外したことにより、千尋が意外と整った顔をしていることを知った。嫌みな感じはなくなり、人を寄せ付ける雰囲気を纏わせている。そんな千尋は知らなかった。初めて口を開き、最初は出せなかつた声が抵抗なく出た。

「黒瀬…」

「千尋。僕は千尋だよ」

にっこりと笑つた千尋は顔を寄せた。いつもはレンズ越しに見る瞳が至近距離で瞬く。千尋は目を細め、吐息が掛かる距離まで詰め寄つた。

動悸が高まつていくのを感じる。

千尋は耳元で囁いた。

「君の声が聴きたいんだ」

高鳴る心臓に手を当て、涼は勢い良く目を開いた。いつもの見慣れた天井だけが見えた。

冷たい汗が額に浮き、涼は手の甲で拭つた。まだ、千尋が囁いた言葉と吐息の熱さを覚えている。

「黒瀬…？」

夢の中での千尋は確実に近付いている。それが示すものが何か、

涼には見当もつかなかつた。しかし、動悸は昔に感じたことのある種類だということはわかつてゐた。だからこそ、相手が千尋であることに戸惑つてゐた。

涼は髪を搔き揚げ、苦々しそうに唇を噛み締めた。

「おはよー」

教室のドアを開けると共に聞こえた声に、涼は動きを止めた。ドアの開く音を聞いて振り向いた千尋は、反応を返さない涼に眉根を寄せた。いつもとは違う、気まずい空気が流れる。

涼はその視線に曖昧に挨拶を返し、自分の席へと向かつた。鞄を置き、一息吐いた涼は、机に腕を投げ出して突つ伏した。

朝から疲れたような気がする。手探りで鞄からイヤホンを取り出し、MDを聴いた。曲名のわからない歌が流れる。

涼は腕に頭を置いて横へ向いた。机に影が落ちたことに気付き、顔を上げた。

「どうしたの？ 気分が悪い？」

心配そうに見下ろす千尋に、涼はぎこちなく笑いかけた。

「いや、大丈夫。：黒瀬、眼鏡取つてもらえるか」

千尋は疑うような眼つきをしたが、何も言わず眼鏡を外した。やはり眼鏡を外すと印象は変わつたが、夢の中で見た千尋そのままだつた。

涼は呆れたように笑みを零し、短く礼を言つてから腕に顔を埋めた。千尋が声を掛けようか迷つてゐると、涼は体を起こし、顔を引き締めて耳からイヤホンを取つた。

「別にいつか。まだ確定しているわけじゃない」

不可解な言葉を残し、涼は千尋に軽く微笑んでから教室を出て行つた。

千尋は眼鏡を外したまま、難しい顔をして涼の出て行つた方向を見ていた。

水曜日の放課後、音楽室に一つの影があつた。ピアノを弾いている千尋に近い席で、涼は演奏を聴いていた。歌いたいときに歌う、という言葉通り、涼は時折ピアノの音に合わせて歌っていた。ソプラノの曲だけではなく、普通の曲でも歌う。三オクターブは出る音域の広い涼の声に、千尋はいつも驚かされていた。曲一つ一つで表情がまるで違う声。

「その声、好きだよ」

不意に漏らした千尋の言葉に、涼は口を噤んだ。前に千尋に言った言葉と同じだが、言われる側になると反応が出来なかつた。歌うのを止めた涼に、千尋は指を動かしながら苦笑した。

「言われる気持ちがわかつた？」

「…ああ」

素直に頷いた涼は、気が抜けたように近くにあつた椅子に座つた。くすくすと笑いながらも、千尋は弾き続けた。

終わりを知らせるチャイムの音が聞こえるまで、二人は音が溢れる空間にいるのが習慣になつていた。

「黒瀬」

千尋は目の前に立つていた。名字を呼ばれ、仕方ない、という表情をした千尋は手を差し出した。握手を求めるその動作に、躊躇いながらも手を出した。

前は自分から重ねた手を、今度は千尋が受け取つた。前と同じ温もりが手から流れてくれる。

「涼」

夢で名前を呼ばれることが嬉しく感じる。現実では呼ばれることがない名前。

そして、呼べない名前。夢の中でも呼ぶことが出来なかつた。

「…黒瀬」

その言葉に、千尋は困つたよつに笑つた。

葛西の絵が完成するということを聞きつけ、千尋は普段より一十分早く登校した。靴箱を覗くと葛西はすでに来つていて、千尋は教室に寄つて荷物を置いてから、美術室へと向かつた。朝に新鮮な空気を肺一杯に吸い込み、吐き出す。そして、美術室のドアを開けた。油絵の具の臭いが充満している。

千尋はその臭いが嫌いではなかつた。

「おはよづ、葛西くん」

ドアの開く音には反応せず、掛けられた声に反応した葛西は振り向いた。千尋の姿を認めるに、軽く挨拶を返し、再び絵に向かつた。少し小さめのキャンバスに広がる色は、青や緑などの様々な寒色が混ざり合つていてもかかわらず、淡い感じになつていて。やはり、白が目立たない程度に曲線や筋を引いていた。前回の夕焼けではないが、こちらも完成が近いことが千尋にはわかつた。

「あれ、雨の絵？」

「そう。さすがだな、コレがわかるなんて」

口元に笑みを浮かべた葛西は、弾んだ声で言つた。理解されれば嬉しい。雨を表現するのは難しく、抽象的ならば余計にわかりにくいい。しかし、それを千尋は言い当つた。躊躇うこともなく、せりつと正解を言つたことが葛西は嬉しかつた。

葛西が色を重ねていくのを見ながら、千尋は首を捻つた。

「前の夕焼けは？」

「あれは完成した。これも同時に描いていたんだ。これが完成したら、並べて見てほしいからな。今は見せられない」

何かを企んでいるかのように忍び笑いをする葛西に、千尋は無言

で頷いた。無理に見せてもらおうとは思わなかつた。気にはなつて
いたが、いざれば見せてもらえるということがわかつたのだから、
それで良かつた。

千尋は葛西の背後に立ち、仕上がりしていく様子を見ていた。

「黒瀬、お前だつたんだな。泉水にMDを送つていたのは」

葛西の指摘に、千尋の体は震えた。見られているとは思わなかつた。誰もいないのを確かめて、細心の注意を払つていたのに、葛西には見られていた。

千尋が苦い顔をしたのは、葛西には見えなかつた。葛西は絵から視線を外さず、いつもの調子で言葉を続けた。

「安心した。あのMDが黒瀬からのものだつてわかつたからな。嫌な予感がしたんだけど、杞憂だつみたいだな」

クツクツと笑う葛西に、千尋は何も言えなかつた。葛西は千尋を信用している。それがわかるからこそ、千尋は言えなかつた。

しかし、それ以上に黙つてはいられなかつた。

「杞憂じやないよ。あれは僕の我が儘だから。…全てを知つたら、きつと君も泉水くんも、僕を非難するよ」

不吉な言葉を残した千尋は、別れも言わずに教室を出て行つた。いつもと違う千尋の様子に、葛西は顔を顰めた。MDを自分の我が儘だと言つた千尋。そして悪い結果を引き起こすと断言した。

葛西は描きかけの絵を見ながら、MDを聴いたときに感じた嫌なもやもやが増えていくのを感じていた。

「あれ、葛西一人？」

開け放されていたドアから涼は声を掛けた。その声に振り返つた

葛西は涼の姿を見て、ほつと息を吐いた。

「さつきまで黒瀬がいた。何か用？」

「絵を見に来たんだ。やつぱり黒瀬も来ていたんだな。教室に鞄があつたから、ここかと思つて」

涼は先程まで千尋がいた場所に立つた。葛西はその涼の位置を見て微妙な笑みを零し、筆を置いて片付け始めた。涼は葛西がいつも

のように明るく振舞わないと首を傾げた。いつもとは何か違っている。噛み合わない歯車のように、何かがずれ始めていた。

涼は、筆を洗いパレットを片付ける葛西に真剣な低い声で言った。

「何があつたんだ」

「何もない。だからこそ、何かがあるのが怖いんだ」

自嘲気味に笑つた葛西に、涼は顎を引いた。葛西が何かを隠していることはわかる。しかし、涼は無理に聞こうとは思わなかつた。言わないということは、それを確信しているわけではないからか、涼が知るべきことではないかのどちらかだつた。

涼は葛西が手に取つた絵を見て、一言漏らした。

「雨の絵…ね」

葛西はその声が聞こえなかつた振りをした。

千尋は美術室を出た後、当てもなく歩いていた。何処へ向かうでもなく、足は動く。千尋は葛西に言われたことを思い出し、胸が締め付けられるのを感じた。

「黒瀬！」

後ろから掛けた声に、千尋は振り向いた。涼が廊下を走つてくるのが見えた。千尋は思わず目を逸らしたが、一度目を閉じてから涼に向き直つた。

涼は千尋の前に立つた。

「何かあつたのか？」

「…別に何も」

突き放すように笑つた千尋に、涼は怪訝な顔をした。千尋と葛西は共に何もないと言つたが、二人の様子から何もなかつたはずはない。

涼は問い合わせようと口を開いた。しかし、声は出さずに、体が前へと倒れた。

「泉水くん！？」

千尋の声が聞こえた後、涼の意識はなくなつた。

千尋は倒れ込んできた涼を受け止め、暫く放心していたが、状況を理解すると、涼の腕を肩に回して引き摺るように保健室へと運んでいった。

風が頬を撫でる感触で、涼は目を覚ました。薬品の臭いが鼻を掠める。そして、微かに風が淡い旋律を乗せてくる。涼はそれがどこから聴こえるのかと顔を動かしたところに、千尋がいた。

千尋は涼が寝ているベッドの横の椅子に座り、窓を開けて外を眺めていた。千尋の口から紡ぎ出されるのは、涼との接点だった。

「マザー・グース…」

涼の声を千尋は聞きつけた。千尋は窓から視線を涼へと移し、柔らかく笑った。

涼は夢の続きをと思つた。

「気がついた？ 寝不足で倒れたんだよ」

千尋はそのままの表情で、涼の顔を覗き込んだ。千尋は眼鏡を外しているため、遮るものがない。涼はまだはつきりしない頭で、千尋を見た。

「黒瀬つて歌、上手いんだな…」

「泉水くんには及ばないけどね。これも嗜みの一つだよ」

千尋は薄く笑い、横に用意してあつた水差しからコップに水を注いだ。千尋の動作一つ一つが丁寧で、優雅に見えた。涼は体を起こし、コップを受け取つた。

「黒瀬つて動作が丁寧だよな」

「躊躇されたからね。母親が茶道を嗜んでいて。丁寧に見える動きは、そこから来ているんだよ。食べ方とか、歩き方とか」

「綺麗だな」

あつさりと言つた涼に、千尋は動きを止め、その後に悔しそうに涼を睨んだ。心なしか、頬が赤く染まつっていた。

「…なんでそう言つかな」

「本当のことだから。自分に出来ないことを出来る黒瀬が凄いなつて」

嘘ではないと言つように涼は簡単に言い、水を口に含んだ。冷たい水が喉を通る。それを心地良く感じながら、涼は千尋を見た。

千尋は諦めたように息を吐き、口元を緩めた。

「有難う。そう言われたのは初めてだよ。いつもは優等生とか、嫌みだとか言われてたから」

素直に褒めるのは大人だけだった。同年代は、自分に出来ないことを羨む。そして、酷いことを平氣で言つ。千尋はそんな反応に慣れていた。傷付いてはいないと言えば嘘になるが、気にしないこと

くらいは出来る。千尋は涼から空になつたコップを受け取り、元に戻した。

穏やかな空気が流れる中、ドアを開ける音が大きく響いた。

「大丈夫か、泉水。倒れたつて聞いて…」

「大丈夫。寝不足で倒れただけだからさ。こっちだ」

葛西は声の聞こえた方の、カーテンで仕切られたベッドへと向かつた。葛西がカーテンを引くと、涼は楽しそうな顔で、千尋は眼鏡を外した笑顔を浮かべていた。

「元気そうだな。安心した」

葛西は気が抜けたようにベッドの端に座つた。葛西の手には紙が一枚あり、それを涼は見咎めた。

千尋も涼の視線から気付き、指でそれを示した。

「何？ それ」

「ああ、コレか。まだ途中だけど、あの絵の写真を撮つてきた」

千尋が示した紙は写真で、ポラロイドカメラで撮られた写真は絵が浮かび上がつてきているところだった。葛西が写真を撮つて急いで保健室に来たのがわかる。

葛西はベッドに一枚の写真を置いた。

「並べて見て欲しい理由、わかるか？」

千尋は雨の絵の写真を取り、涼は夕焼けの写真を取つた。二人が

それぞれ手に取つた写真を見て、葛西は含み笑いをした。

その葛西の笑いに涼は気付き、千尋は気付かなかつた。千尋はまだ仕上がつていない方の雨の絵を見入つていた。

涼は千尋の様子に苦笑し、写真を人差し指を中指で挟んで葛西の目の前に掲げた。

「寒色と暖色…対極の位置にあるけど

「それでも、互いに優しい」

涼の言葉に、千尋が続けた。葛西は正解、とでもいうように指を鳴らした。そして涼から写真を受け取り、ひらひらと振つた。

「それ、お前らなんだ。ちょうどそれを持ってた通りに、夕焼けが

泉水で、雨が黒瀬。綺麗だろ？」

してやつたり、とニヤニヤ笑う葛西に、涼は溜息を吐いて笑つた。

千尋は照れたように葛西を睨み、写真を返した。

絵は確かに綺麗だつた。しかし、それが自分だと言わると、千尋には歯痒かつた。涼は特に気にせず、ベッドの上で背に枕を挟んで凭れていた。

千尋は苦笑した。

「嬉しいけどね…」

「恥ずかしいだろ？ 前に一回、雪を俺のイメージだつて描かれたから、免疫が付いた。でもまあ、悪くは思われていらないみたいだからいいけど」

涼の投遣りな言い方に、葛西はそれを思い出して可笑しそうに笑つた。こんなときはいつも千尋は取り残される。二人の過去は知らない。しかし、葛西はその話題を続けようとせず、表情を改めて涼に真剣に向き合つた。

「寝不足で倒れたって言つてたよな？ なんでだ？」

葛西の疑問に、千尋も後押しするように頷いた。一人の視線を受けて、涼はふつと破顔した。

「大した理由はないよ。ただ、小説を読んでいて、止まらなかつただけ」

下らない理由に葛西は脱力して顔を下に向け、千尋は安心したようにな笑した。

このとき、涼は何かの意味を含んだ笑いを浮かべていたが、二人にはその真意を知ることが出来なかつた。

涼は、夢で千尋に逢うことが怖かつた。自分の気持ちが嫌でも変化するのを感じてしまう。しかし、それ以上に楽しみにしていた。

今、現実に眼鏡を外している千尋を見て、胸が高鳴つてゐる自分がそこにいた。

雨の絵が仕上がったと葛西から聞き、涼は放課後一人で絵を見に行こうとした。教室に千尋の姿はなかった。美術室へ向かう廊下の途中で、聞き覚えのある声を聞いた。

その声は一年生の教室から聞こえる。微かに漏れる声は、その教室にいるはずがない人物のものだつた。

涼は消えそうなほど小さな声を、聞き逃さなかつた。人物に検討をつけ、そつとドアを開けた。音楽室での出来事と重なる。

「…大丈夫みたい。そのせいじゃないよ」

ドアの隙間から見えたのは、思つたとおり千尋だつた。携帯電話で話す声は親しみが込められており、どこか楽しそうだつた。

涼は盗み聞きするつもりはなかつたが、声を掛けるタイミングを外し、そのまま話を聞いていた。

「…うん、上手くいってる。もうすぐ叶う。次は何を入れよう…駄目だよ。姉さんだつて共犯なんだ。悪くはないよね? MDで催眠効果が上手くいくつて実証できたんだから」

息が出来なかつた。涼は何を言われたか理解するよりも速く、体は反応した。頭が痛くなるのを感じながら、涼はゆっくりとドアを開けた。

その音に千尋は振り返り、涼を見て目を見開いた。そして、耳まで持ち上げていた携帯電話を持つ手を落とした。携帯電話からは相手の声が漏れていたが、気にする余裕はなかつた。

千尋はボタンを押して強制的に通話を終わらせ、涼の顔を窺つた。涼は冷たい笑みを浮かべた。

「楽しかつたか?俺がお前を好きになつていいくのを見ていて。黒瀬を恋愛対象として見ていくのを見ていて」

「違う!そのためにやつたわけじゃない!」

涼の感情のない声に重なるように、千尋は勢い良く言つた。涼は

表情を変えず、温度の下がつていく笑みを顔に貼り付けていた。

MDでの催眠効果。涼の夢に千尋が出てくるようになつたのは、MDを聴き始めてからだつた。すぐに千尋が出てきたわけではなかつたが、今までの経緯から考えればそうとしか思えなかつた。描写が細かいのも理解出来た。千尋が作つていたからこそ、眼鏡を取つた顔さえも寸分違わず構成されていた。夢の中での千尋の様々な要求。それは自分をからかうためのものだと、涼は思つた。恋愛対象として好きになるように仕向けられていた。そつとしか、思えなかつた。

「じゃあ何のために?」

「声が聴きたかった。ただ、それだけだよ」

泣きそうに微笑んだ千尋に、涼は冷たい笑みを返した。怒りを表してくれれば対処できるのに、涼はそれを許さなかつた。責めもせずに、突き放す。千尋はその距離が怖かつた。涼は調子を変えない、いつもの声で言つた。

「それなら、ここまでする必要はなかつたはずだろ。理由は明確だからかつていたとしか思えない

「違う違う違う!」

「違わない」

きつぱりと否定した涼は、笑みを凍りつかせたまま腕を組んだ。品定めをするような涼の態度は拒絶を示していた。胸の前で組まれた腕は千尋を拒んでいる。

千尋は諦めたように顔を下に向け、机の上に置いていた鞄を手に取つた。鞄の中から一枚のMDを取り出し、涼に投げた。それを涼は難無く受け取つた。

「催眠を解除するMDだよ。これで、全てが終わる」

涼は頷き、体を反転させて出口へと向かつた。廊下に足を踏み出すとき、後ろから声が聞こえた。

「ただ、名前を呼んで欲しかつた」

千尋はそれ以外は何も言わず、動かなかつた。

その言葉が涼の頭の中で響いた。

夢に十尋は近づかなかった。

「そういうことか」

涼はベッドに横たわったまま、額に手の甲をつけて呴いた。MDを聴いて、涼の気持ちは変わった。前と違うMDは、確かに変な霧のようなものを消した。

後に残つたのは、明確になつた想いだけだった。

「もう嘘はつけない」

涼は口の端を上げた。そして携帯電話を取り出し、電話を掛けた。数回の「ホールド」で相手は出た。

『なんだよ…泉水』

「悪いな、朝早くに。起こしたか？」

『嫌、起きるところだつたからいい。で、何の用だ？』

欠伸を噛み殺した葛西に、悪いと思いつながら涼は口を開いた。

「あのMD、黒瀬からのものだつたんだ」

『…それで』

「あの中には細工がされていて、俺が黒瀬を好きになるように催眠効果が施されていたんだ」

葛西の息を呑む音が聞こえた。涼は淡々と説明を続けた。

「昨日、催眠を解除するMDを貰つて聴いた。いつも夢に出てきていた黒瀬は出てこなかつた」

『「じめん、泉水。黒瀬がMDを入れていいところを見てたんだ』

「いや、この結果は変わらなかつたはずだ。気にしなくていい。これではつきりした」

『何がわかつたんだ？』

葛西の問いかけに、涼は笑つた。その笑い声を聞き、葛西は涼がおかしくなつたのかと思った。しかし、涼は楽しそうに笑つたまま、話しを続けた。

「黒瀬のことが好きみたいだ。恋愛感情として

涼はきつぱりと言い、葛西は沈黙した。涼は嫌われたかと思ったが、そのまま通話を続けた。

涼が声を掛けようとしたとき、葛西の笑い声が聞こえた。爆笑と言つても過言でないほど、葛西の笑い声は大きかった。

『心配して損した。なんだ、良かつたじゃないか。傷付かずに済んで』

飽くまでも涼の心配をする葛西に、涼は失笑した。

「俺と黒瀬が付き合つことになつたらどうする？」

『別に。関係ないだろ？ 俺は第三者なんだから。当人でやつてくれ』

突き放すような言い方は、偏見がないことを示していて、涼は笑みを深くした。友人が、しかも同性が付き合つことになつても気にしない葛西。そんな葛西だからこそ、近くにいても不快だったことはなかつた。

「でも、黒瀬の気持ちを聞いていないから、何も言えないけど」

『それだけのことをされて、わかっていないわけじゃないだろ？』

『はつきり言われない』

『…お前から言つ気はないんだな』

深く溜息を吐いた葛西に、うん、と涼は軽く返した。葛西は呆れたように笑い、優しい声で言つた。

『それでも嫌いじゃないんだ、お前のことは。もちろん黒瀬もな』

葛西は通話を終つさせた。

涼は普段通りに登校した。靴箱を確かめると、千尋は既に来ていた。涼は顔を引き締め、教室へ向かつた。

静かに教室のドアを開けると、その音に反応した千尋が振り向いた。視線が合い、千尋は逸らした。

『黒瀬、話がある。移動しよう』

涼の提案に、千尋は何も言わずに従つた。一度も振り返らずに、

涼は一直線にある場所へと向かった。千尋はどこへ向かっているのかわかり、胸が締め付けられるような痛みを感じた。

涼は教室に入った。田の前にはピアノがあった。

「催眠は解けた。変な霧がなくなつた。気持ちも、変わった」

「…それで」

千尋は決められた位置であるかのように、ピアノの前へ座つた。涼はいつもとは違つてピアノに寄り、凭れた。

千尋は蓋を開けて鍵盤をなぞつた。音が出ないほどの軽い動き。それを涼は含みのある笑いを浮かべて見ていた。

涼が何も言わないことを不思議に思った千尋は顔を上げた。千尋の目に映つたのは涼の不可解な笑みだけで、その後に唇に何か当たるのを感じた。

涼の顔が離れて、千尋はその正体がわかつた。

「それでも好きだったよ、千尋」

名前で呼んだ涼に、千尋は複雑に笑つた。

「その『好き』の意味って…」

「何だろうな?」

曖昧な返事をした涼は、戸惑つている千尋をそのままに、教室を出ていった。

残された千尋は、混乱する頭を整理しようとした。唇に残つた感触だけが、はつきりと理解できた。

「性格悪いよな」

教室を出たところで涼は葛西に声を掛けられた。葛西はドアに体を預け、顔を歪めていた。涼は葛西が話を聞いていたことを察した。涼は意地の悪い笑みで返した。

「そうかな? 否定はしないけど

「楽しそうなお前を見てれば、好きの意味なんて自然にわかるのに

な

葛西の正解を含んだ言葉に、涼は純粹な笑みを浮かべた。簡単な
答えだつた。それをどちらが先に言うかの問題だつた。それを言つ
てしまえば、全てが変わる。それは決まつていることだつた。
涼はこれから起ることが悪くはないことを確信し、一人ほくそ
笑んでいた。

おまけ・葛西の彼女

「紹介するのが遅れただけだ」

「初めまして、諏訪小百合です」

葛西晃一の隣には、モデルと言つても通用しそうな美人がいた。

「いつから？」

「春から付き合つてゐる」

葛西の嬉しさを隠そうとしている表情に、涼は苦笑を漏らした。

そして、小百合に向き合い、爽やかに笑つた。

「泉水涼です。葛西をわかつてくれる人がいて、嬉しいです」

「うーん晃一くんに聞いていたとおり、面白い人ね。私も君みたいに理解者がいて嬉しいわ」

小百合は屈託なく笑みを浮かべた。葛西たちは五歳差なのに、距離を感じさせない笑みだつた。

会つ前に、葛西は両方に簡単な説明をしていた。小百合のこと、涼のこと。涼については、恋人のことまで話していた。

「黒瀬千尋です。葛西くんから説明は…」

「うん。泉水くんの恋人だよね」

あつさりと言つた小百合に、涼と千尋は顔を見合せた。それを見た葛西と小百合も顔を見合させ、同時に笑つた。

葛西は困つたように、小百合は楽しそうに笑つたまま説明した。

「私の親友がね、男同士で恋人関係なの。一人には恋してたけど、今ではどちらも大切な親友。そういうわけで、変だと思わないわよ」「で、俺は小百合さんの親友に会つてたから、泉水たちに偏見はなかつたんだ」

千尋は納得したように頷いた。隣で涼もへえ、と顎に手を置いている。

葛西と小百合の出逢いは、コンテスト受賞の絵が展示されている

会場だつた。そのコンテストで葛西は佳作を受賞し、表彰式後に小百合が声をかけた。

葛西は小百合を見て初めて人物画を描きたいと思い、小百合に頼んだ。小百合は自分が惹かれた絵を描いた人が、自分をどう描くか興味があり、迷うことなく引き受けた。

その後、何度も会つていてる内に、互いが離れ難くなつていき、付き合つことになった。

「小百合さんの親友に会つたのが泉水から電話があつた日の一週間前で、運命感じたな」

「そうだつたんだ…。うん、運命ね。そう思いたいかな」

涼が幸せそうに言つたのに対し、千尋は揺つたそうに苦笑を漏らし、葛西は愉快に笑つた。

いつの間にか広がつていく繋がり。誰が中心になつてているのかわからないほど、偶然で、運命的に交差する。

「世間は狭いつて言うしね。今度は泉水くんに親友を紹介したら、隠れた繋がりが見付かるかも」

小百合の意味深な発言に、三人は顔を見合せた。

まだ、どこかで誰かが繋がつていてる。

おまけ・葛西の彼女（後書き）

「最後の最後に逢つ運命」の後の話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8958c/>

絶対音声

2010年10月8日14時50分発行